

ポール・エルマー・モア「ラフカディオ・ハーン論」

村松 眞一 訳

**Paul Elmer More, “LAFCADIO HEARN”
Translated into Japanese by MURAMATSU Shin-ichi**

村松 眞一

MURAMATSU Shin-ichi

Abstract: The New Humanism in America in the early 20th century has almost been obliterated today. Yet the following essay on Lafcadio Hearn by Paul Elmer More (1864-1937), one of the leading critics of the movement, is unprejudiced, penetrating and sympathetic, in a wide perspective of the East and the West, with a good knowledge of Sanscrit and Hindu philosophy. More points out first Hearn's self-restrained and suggestive style, quite suited for arguing a power of after-suggestion in Japanese poetry; second, as to the substance of his writing, the most extraordinary achievements of his art. More writes: “He proclaims his mysteries at the meeting of three ways. To the religious instinct of India, --Buddhism in particular, --which history has engrafted on the aesthetic sense of Japan, Mr. Hearn brings the interpreting spirit of occidental science; and these three traditions (Hindu, Japanese, and European) are fused by the peculiar sympathies of his mind into one rich and novel compound, --a compound so rare as to have introduced into literature a psychological sensation unknown before. More than any other recent author, he has added a new thrill to our intellectual experience.” The remarkable thing is that More quotes “Ingwa-banashi” as a typical example of the new feeling of the weird, and that, in the latter part of his essay, calls attention to that enormous past of our being, “the Sea of Death and Birth”, out of which answers within us some eddying immeasurable of ancient pleasure and pain. (“At Yaidzu”, Pt. IV)

Keywords: Lafcadio Hearn, P. E. More, after-suggestion, religious instinct of India, aesthetic sense of Japan, Occidental science, psychological sensation, the weird,

ラフカディオ・ハーン、ポール・エルマー・モア、余韻、インドの宗教的直覚、日本の美意識、西洋科学の概念、心理的感動、不気味さ

【訳者まえがき】

20世紀初頭に起きたアメリカのネオ・ヒューマニズムのことは、今日ほとんど忘れ去られている。人文学への、ひいては人間性への、危機意識に発したこの批評運動の指導者はアーヴィング・バビット（1865-1933）とポール・エルマー・モア（1864-1937）で、経験の人間性を重視し、その本質を倫理的であるとして、ロマン主義的放恣をいましめ、克己的で節度ある、中庸な人間の在り方を主張した。第一次大戦後、バビットは内面的自律・^{ヒューマニティ}訓練を欠いた民主主義社会は必然的に権力意志に支配されると考え、原爆出現の警告まで行なった（石田憲次『エマーソンとアメリカのネオ・ヒューマニズム』、研究社、1958）。しかし早いころのモアのラフカディオ・ハーン論はあまり知られていない。今あらためて読んでみると、ハーンに対する正当な評価は驚くばかりである。モアはサンスクリットをよく読みこなし、広い視野と、繊細で豊かな詩的感性、柔軟な思考に優れていた。（『怪談』の序文によると、生前ハーン自身が、『アトランティック・マンスリー』1903年2月号に掲載されたモアのハーン論を認め、感謝と賞賛を惜しなかった）。

ハーン評価については、概して今のわが国のハーン研究者と、西洋の日本研究者の間に大きな落差があると言われ、そのギャップに関心をもつ比較文学者も多い。ハーンのように欧米と日本の両方の文化を生きた作家を、東西の研究者は、ややもすると、双方自分の方へ引きよせて理解しがちなものである。あれほど旧日本に対し、稀に見る深い理解を示し、日本に帰化した外国人作家を、日本人が高く評価し、感謝するのは当然と言えば当然であろう。しかし今ここで百年以上も前に書かれたモアのハーン論は見直されてよいのではないか。そして東西の落差に注目するのも比較文化的に意味はあろうが、文化の融合という観点から、ハーンを意義深い融合文化を創り出した世に稀な外国作家と見るほうが、バランスのとれた、公正な解釈と評価に向かうことができるように思われる。

以下に訳出したモアのハーン論は、ハーンの死後加筆され、評論集 *Shelburne Essays* に収められたもの（訳者の底本は *Selected Shelburne Essays*, O.U.P., 1935）。その要点は、第一にハーンが当時困難と考えられた東洋文化と西洋文化の融合を成しとげていること（具体的には、インドの宗教思想と日本の美意識と西洋の進化論という三つの要素の不思議な融合）と、第二には、ハーンの新しい心理探究により、我々にとって過去は生きており、現に生きている我々も同時に祖先となる、幽霊的な存在であるとの指摘で、その例証として「因果ばなし」や、最高の作の一つ「焼津にて」の第4部にふれていることである。ちなみに *Shelburne Essays* 11巻は、モアのニューヨーク時代の記念碑的評論集。

ネオ・ヒューマニズムは、ある意味でT. S. エリオットの出発点になったとも言われ、モアはのちにエリオットを高く評価したが、そのモアが20世紀初め、ジャポニズムの思潮の中でハーンを正当に評価したことは特筆すべきである。彼は東洋思想への理解も深く、豊かな英米文学の造詣と詩的天分に恵まれ、論客というよりは余裕ある文人的な批評家で、擬古的と言われる味わいあるその文体は、ハーンを論じるにもふさわしいようである。

作家ハーン氏の特異性

ハーン氏の生涯には、その著書と同様に、ほとんど伝奇的^{ロマンチック}と言ってよいものがあった。彼はアイルランド人を父に、ギリシャ諸島の出の女性を母として、成人した若い時代をアメリカで過ごし、やがてみずから天皇^{ミカド}の臣民となり、日本の婦人を妻として、その国の習慣と宗教をとり入れたのであった。今年（1904）の彼の死去に際しては、完全な仏式で埋葬され、それほど著名な外国人としては、これが初めてのことであった。そして、ほとんど彼の最後の幕切れとなった行為は、幻のような東洋の神秘を西洋の言葉に移し変えるという、彼の極めて真剣な試みの最終校正を、電文で行なうことであった。こうして、彼の『日本——一つの試論』は、現代の最も特異な芸術的成果の一つと見做されるべきものを完成した。というのも、我々は彼の文学的な著作を、不思議な明察の芸術と見做すべきだからであり、それは、いわば何かなじみ易い溶剤のように、かつて溶け合うことのなかった三つの要素を、一つの化合物に融合させた芸術だからである。

抑制的なスタイルの余韻

この芸術の単に上辺の様式だけ見れば、確かに、神秘的なものはない。彼の書きものを一読すれば、余韻の力と結びついたあの抑制感が直ちに認められ、それを彼は日本の詩歌の特性によるものとして述べながら、それがまた等しく彼自身の生来のものになっている。日本語で「いったきり」（ittakiri）という言葉がある。これは「みな言いきった」「全部消え去った」という意味らしいが、すべてを言い尽くし、読者の側の想像力に何も委ねるものがない韻文を指して、日本人が軽蔑的に言う言葉なのである。何か言わずにおいたために、そのときめきが心に残る文章を彼らは賞賛する。「ただ一回打ち鳴らした鐘の音のように、完全な詩は、聞き手の心に、多くの、定かならぬ、あとに長く引く余韻を、呟くように、そしてうねるように与える」のである。さて、こうした名状しがたい余韻こそ、ハーン氏の最も簡単な描写が与える効果に他ならない。例えば、彼が描くところの、無気味でおよそ美しくもない巨大な建造物の間、ブロードウェイ^{キャニオン}の峡谷を歩いて通る印象、途方もなく産出されるが何の共感もなく、休みなく動いているが何の同情もないただの知覚——このようなブロードウェイの恐怖が、わずかな言葉で経験の深みにまで達する長い感動の震えを、読者の心中に鳴り響かせるのである。あるいはまた、彼が語るそれとない言及だが、ロンドンの公園で、別れる誰かに向かって一人の少女が「お休みなさい」と言ったという話。ここにも、読者の心中に人生の最も悲しい別離や悔恨の記憶をもたらし名状しがたい余韻が呼び覚まされる。彼は完全な抑制による暗示の力を用いているのである。

三つの伝統文化の融合

しかしこの自己抑制的で暗示的なスタイルというものは、彼の芸術の、言わば道具、様式といったものに過ぎない。もし我々が彼の書き物の実体を調べてみるなら、それは三つ

のはっきりと区別された、ほとんど互いに破壊的に作用する哲学から借りてきたものであることが分かる。その各々が単独なら、普通の作家の才能に材料を供するといったものであろうが。彼は三つの道の合流点に立って、彼の不思議な物事を開陳する。すなわちインドの宗数的な直覚に——とくに仏教に——それは長い歴史によって日本の美意識に植えつけられたものだが、ハーン氏は西洋科学の解明的精神を持ち来ったのである。そしてこの三つの伝統（インド日本およびヨーロッパ）が、彼の心の特有な共感によって、一つの豊かで新奇な化合物に融合された——一つの化合物、それは極めて稀に見る、以前知られていなかった心理的感動を文学にもたらしたものである。どんな他の最近の作家にもまして、彼は我々の知的な経験に、新しい感動を加えたのである。

日本文化の装飾美

日本については、それがハーン氏の作に最も明白な、それと分る基礎を与えているものだが、国民が古代ギリシャ時代このかた、世界で唯一の純な芸術家である、と言われていることである。そしてある意味では、もし我々が彼らの師、中国を忘れなければ、まさにその通りなのである。ギリシャ人の想像力には、ある深さと含蓄があつて、それがギリシャ芸術を、日本人の創造に成るひよわな美しさよりも一層普遍的に意味深いものとしているのだが、しかしギリシャ人自身それに勝ることなく、匹敵すらしないのが、日本人の全包括的な装飾美の愛好である。モーティマー・メンペス氏¹やその他の旅行者が記録する日本人の日常生活の話を読むと、おおかたの我々にはお伽の国の話と思われるほど、西洋の理解とはかけはなれた国民気質と接触することになる。例えばメンペス氏が日本の友人と団十郎²を訪ねたとき、彼はこの名役者の部屋に飾られた一本のすばらしい掛け軸を見つけたのであった。その美しさに関心していると、彼は友人に、団十郎が訪問客の趣味の性格を的確に知るのに苦労して、それからただ、この特定の絵を見せることにしたのだ、と言われた。日本人にとって、掛け軸を掛けること、あるいは花を活けるということは、重要な生活の機能である。実際、生け花は精密な技能であつて、師匠として認定されるには、七年、ときに十四年間もその研究にささげることになる。自然そのものが、この精緻な訓練方式に従っていて、しばしば、日本の風景の中で、外国人には自然な成長と思われるものが、辛抱づよい人間の熟練の業なのである。

偶然性というものは〔メンペス氏が書いているところによると〕、世界を飛び回る人になるほどとかくも感心する木々の美しい曲線には、見当たらない。これらの木々は、しつけられ、形づくられ、装飾的な型をなすよう強制されていて、その結果は——完璧ということである。我々西欧の人間は、もしも〈自然〉をその優美な成長のままにしておけば、それは常に美しくなるだろうという錯覚のもとに努力している。しかし日本人はもっと先を行っている。すなわち、時折、木々は成長して醜い枝ぶりを作ってしまうこ

とがある、ということを知っているのだ。そしてどのように木々を改作し、それに手を添えるかを、正確にわきまえている。〈自然〉は、彼らにとっては何かある美しい楽器のようなもの、それも人間の手で作られたどんなものより精巧なものだが、しかもやはり楽器で、巧みに工夫して諧調を引き出すべきものなのである。

日本詩歌（俳句）の美

そして、同じ繊細な美的感覚が、お望みなら人工的趣向も加えられて、この国民の文学にも浸透している。我々は日本人を、模倣する国民と見做す習慣があり、それも当たってはいる。しかし、彼らの詩歌は、これはハーン氏によって納得するのだが、一つの独創的な芸術で、中国や他のどの国からも借りてきたものではない。そして彼らの詩を措いて他に、彼らほどの想像力の素早さと器用さ、および記憶の中にたゆたう余韻をとどめる巧緻な美意識を、我々は認めることがないのである。英語でこれらの詩の特有な優美さを再現することはまったく不可能だと、我々は得心する。しかしハーン氏の書物に散見する一見不注意に見える翻訳から、少なくとも彼らの原作の、ある概念は得られる。彼らの詩の連の多くは、単に民俗伝承の一こまか、無名の詩人の作で、例えば、次のような蟬を描いた一句である。

見よ、松の梢で、蟬がひとり——最後の夕日をつかもうと空しき試み

英語で表せばいとも軽い内容だが、日本語をまったく知らない者でさえ、原語のリズムと比べると、まるで四足獣の歩みを、蛾がひらひら舞う姿と対比するようなものであることが分かる。

せみ一つ 松の夕日を かかえけり (Semihitotsu matsunoyuhiwo kakaekeri)

原語ではわずか十六音節しかない。そして実際これらの詩はみな一連の枠におさまるように作られ、ちょうど内外とも彩色された壊れやすい小さな花瓶のように、鑑識家によって非常に高い評価を受けるといったものである。しかしこうした小さな言葉で描く絵は、巧妙な制約のおかげで、時としてその美しさのなかに、愛のごとく広く、墓のように深い情緒の反響をこめることができる。

風のきまぐれか——やはり思い出のしるしか——この落葉ひと葉、亡き人に注ぐ水の上に

墓に祈り眩けば——ひらひらと蝶が舞い立つ——もしや君の^{たましい}靈魂か！

(「小詩片々」)

この審美的優雅さ、この巧妙な筆致、この抑制による暗示力の幾分かを、粗雑な英語散文の媒体を通して伝えることが出来たとしても、わずかな賞賛にも価しないであろう。しかし、この芸術的繊細さの背後にひそむものは、インドの厳しい宗教思想の面影であり、この優雅な芸術家の国で不思議にも追放されたが、さらに不思議にも彼らにより同化吸収された人生無常の意識なのである。そしてこれまた、ハーン氏が再現に成功している。我々は、多くの最も軽快な詩連の陽光に潜んでいる、このようなインドの信仰の影を感じる——すばやい異国的痛烈味、ただそれだけのものではあっても。次のような句には、それが一層強く感じられ、果てしない転変と、絶え間ない生と死とまた再生の意識によって触発されたものである。

有為転変はこの世のならい でも恋の契りは変わるまい

二人を結んだ^{ともづな}縄 さえも 遠い前世の結び綱

(「日本の俗謡における仏教引喻」)

インド哲学が説く因果の法則

果てしない転変、絶え間なき往来、そして過去が未来に投げかける影、——これがインド哲学の本質である。しかし、この哲学の調子は、ガンジス川流域から^{ミカド}天皇の装飾的な国へ移りゆく間に、何とそれ自体変わってしまったことか！繰り返し繰り返し仏教は、存在の根本原理、すなわち万物は構成要素から成り、流動するもの、万物は移ろうもの、ということ説いてきた。これは〈万物は流転し留まることなし〉というギリシャ哲学と同じで、哲学を宗教とする強い情感によって深められたのである。この、常に回転して止むことの無い存在の車輪のなかで、ただ一つの事実、^{カルマ}業だけが確実で、これは現在の状態はことごとく以前のある行為の結果で、現在の行為は必然的に、ことごとく何らかの未来の状態に結実すると断言する因果の法則である。蒔いた種は刈り取らねばならぬ。我らは実際、前世の行為によって我ら自身で作りあげた宿命の子である。我らは自分で釘づけした鎖に縛られているが、それでもなお、我らの欲望は自由であり、欲望が形を成すにつれて我らは行動し、我らの業を作りあげる。そして我らの欲望が自己放棄するに及んで、我らは行為を止め、この世から解放される。果てしない転変は因果の法則に従う——我らの人格でさえ、この意味のない流動のなかで定常ではない。というのも、それもまた構成要素からできていて、死ねば、肉体が分解するに及んで分解し、ただ後にカルマが残って、新たな肉体をそなえた新たな人格を作りあげるのである。この普遍的無常の認識から来ているものが、いわゆる仏教が説く「真理」、悲しみがすべての存在の特質だということなのである。この世に生まれることは悲しみであり、老いも悲しみであり、死も悲しみ、願望もまた悲しみである。仏陀の使命は、この悲しみの束縛から、あたかも燃えあがる家の危険を脱す

るように、人々を救い出すことであった。大いなる悟りがゴータマにひらめき、彼が仏陀となった時、彼が口ずさんだ勝利の歌は、大いなる災難^{わざわい}を逃れた人の叫びであった。

しかし、仏教徒が存在の無常と悲しみをそれほど強調するからといって、彼を悲観主義者と呼ぶのは適当ではない。それどころか、仏教の支配的な調子は喜悅である。というのも、それがまた福音の教えであるからだ。こうした牢獄の家を建ちあげる者は我ら自身の願望にほかならず、他のすべては我らの力の及ばないとしても、こうした願望は我らの抑制できるものである。世俗の人々には、仏陀のこの教えは悲観的な闇に包まれているように見えよう。彼らにとっては消滅の別名にほかならないのだから。しかし精神に関心ある人々には、それはえも言われぬ喜びをもたらした。なぜならば彼らは解脱ということが、個性の束縛を脱して、一種の筆舌に尽くし難い自由の境涯に入ることの意味するということが分かったからである。それは、その純な形においては、感傷的で、動揺する人々にはとうてい向かない、厳しい信仰、——悲しみの認識において厳しく、精神的喜悅の教えにおいても厳しい信仰なのである。

日本人が受け容れた無常の美

しかしなお、仏教の不思議な適応性は、それが日本人の中で、確かに古代インド人と気質において極めて異なるすべての人々に受容されていることに現れている。ここでは、インド人の無常の法則への沈思黙想は、日本人の著しい特徴となっている、事物の移ろいゆく印象に特有な感受性と融合していて、彼らの繊細な美意識はこの中途半端な精神的洞察によって高められているのである。そしてそれは彼らの気質を深めてもいる。何かあることを、言わないでただ暗示するだけという、こうしたすべての優美な詩連によって呼びさまされる感情、ハーン氏が言及する「いったきり」を避けること、一回うち鳴らした鐘の音のあとに漂う余韻というものは、日本の芸術のこれら花瓶に残されたインドの哲学の残留物に帰せられるべきもの、と私は思う。ハーン氏は書いている、「仏教は、自然が夢であり、幻影であり、走馬燈のような光景である、ということを教えたばかりでない。それはまた、人々〔日本人というべきであろう〕がいかにして、そうした夢のはかない印象をとらえるか、またいかにそれを解すれば、最高の芸術たらしめるか、を教えた。」

仏教が日本へ伝わってきた時、一種の祖先崇拜である国民的宗教・神道と接触することとなったが、これは生者の世界は死者の世界に直接支配されていると宣言するものであった。この民俗信仰にカルマの教義がたやすく接木され、この両者がそれ以来並存して栄えた。祖先が守っていてくれるという信仰と、我ら自身のおびただしい前世が、現世でその効力を表すという信仰は、複雑にもつれ、混同された。日本の仏教徒にとって、過去は死んだものではなく、どこまでも生き続けており、現在を、西欧の精神には容易に理解できない目に見えぬ影響の無限の網のなかにくるんでいるものなのである。

そしてインド人の無常への恐怖と救いの喜悅は、それぞれの言われを伴って同様な変化

をとげた。第一に、恐怖と喜悅の鋭い対比は和らげられた。悲しみは、刻々と移ろう美を惜しむ空想的な感情へと薄らぎ——ヘリック³の「薔薇の花摘みたまえ、今かなう間に」とか、マレルブ⁴の「げに薔薇よ、彼女は生きぬ薔薇のいのちを」のような幾多の西洋の歌によって語られる、あの同じ哀惜であるが、この日本の詩になると、少し神秘的で、インド的な瞑想の影響を響かせて、より固執の強いものになっている。そして喜悅はその精神的な支持から切り離されて、その高い恍惚境を失い、ほとんど哀惜と区別できないものになる。悲しみもまた喜びも、無常なるもの、かくて悟りをえた心も、時の空費から積み重ねられた折々の美しい瞬間に、去り難く、優しくこだわるのである。ここにはもはや、インド人修道僧の精神的高揚、「禅」の境地はなく、芸術家の与える魅惑的印象に終わっている。ガンジス川の宗教は、日本では美的情趣の仮面をつけた。

幽霊的不気味さ

ところで、この情趣の洗練をハーン氏は彼特有の気質によって、英語というきめの荒い繊維でほとんど奇跡的に生み出したのである。しかしさらに特異なことに、インドの日本に及ぼした一層深い影響——日本人が不思議な新しい心理状態へ目を移す機敏さの見える思想やイメージ——を読みこもうとした。優しさと美を、つきまとう幽霊の暗示と混ぜ合わせるという傾向は、日本人の気質に初めから固有のものであると仮定してもよいかもしれない。しかしハーン氏が翻訳した物語の多くに流れる特有な想像の形は、たしかに、ただ日本だけの産物ではない。またそれが純粋にインドのものでもない。インドの文学はグロテスクなものを多く含んでいるか、一片の幽霊的な、この世のものならぬ不思議さもない。というのも、その宗教的な調子はあまりに厳格で、そうした特質が必要とする、暗示的な象徴がないからである。厳しい無常の意識と道義的な責任を、花のような日本の美意識と混ぜ合わせるころから、この新しい不気味さの感覚が生まれる。この二つの気性がいかに親密に溶け合っているか、その産物がいかに希少なものは、「因果ばなし」と呼ばれる小品にうかがうことができよう。

進化論との適合

ハーン氏の芸術が、日本の物語の、繊細で幽霊の出る不思議さを再現するだけで十分だとしていたら、注目に価はしても文学への驚くべき貢献はほとんど成し遂げなかったであろう。しかし、こうした東洋文学の裏道の研究に、彼は第三の要素である支配的な西洋科学の概念をとり入れた。そしてこの要素を、インドの宗教と日本の耽美主義に結びつけて、官能的で、また幻惑的なまでに、融合せしめたのである。この三重の結合にこそ、彼が真に高い独創性を認められてしかるべきものがある。

仏教を、その純粋な原典に遡って研究した者にはよく知られている事実であるが、わが近代の進化の概念は、西欧のどんな教義よりも一層容易に、また完全に仏教的心理に適合

するものである。従って、ハーン氏がその東洋的瞑想を支持するために、極めて自由に引用する西欧の作者が、ハクスレー⁵やハーバート・スペンサー⁶であっても、これは当然なことである。たいてい、これら西欧の科学への言及は行きがかりのことが多い。しかし「前世の観念」という一篇のエッセイでは、彼は、何らかの哲学体系によって、進化と仏教的前世の観念の調和を図ろうと努めており、その観念とは、彼が示すように、「忠実」とか「靈魂不滅の暗示」というようなワーズワスの詩に具体化された輪廻の粗末な形とはほとんど共通性のないものである。彼は自説を弁明するためにハクスレー教授を頼りとして、次のような言葉を引用する。「せっかちな思想家でもない限り、それ自体馬鹿げているという理由でこれを退ける者はいなくなるであろう。進化論そのものと同様に、輪廻の説も、現実の世界にその根拠をもっている。従ってそれは、類推によるこの大いに真面目な議論が与える支持を当然要求してもよからう。」さらに、涅槃について述べたエッセイで、彼は無常の教義を、この教義から涅槃の概念が自然な推論として出てくるのであるが、進化の科学における同様の概念と比較する。彼はハーバート・スペンサーの言葉を引用している。「あらゆる感情や思想は、一時的なものにすぎない。いや、人生が移ろいゆくその周辺の事物も、その移ろいの程度は少ないはいえ、それぞれその個々の性質を、遅かれ早かれ失ってゆく。我らが学ぶこと、それはただ一つ不変のものは、こうしたあらゆる変化する姿の下に隠れた不可知の実在である、ということである。」

「不可知」を感知する新手法

この類比は適切ではあるがまた誤解の恐れもある。たしかに我々は、東洋の信仰にも西洋の科学にも、あらゆる現象は、我々が人格と名づけている究極の現象も含めて、——これらすべての現象は、背後に永遠に言い表しえない〈実在〉が横たわっているところの、絶え間ない流動と変化を受けているという観念をもっている。この類比は、ここまでは酷似していて、ハーン氏のエッセイの独創性の主な特徴であると私が述べた、伝統の特有な合成を可能にしている。しかし次の段階では、この二者は、日の出と日没の違いと同じくらい隔たっている。スペンサー氏にとって、またすべての科学の代弁者にとって、ただひとえに知り得るものは、無常な現象界であって、目に見えない永遠不変の〈実在〉は大いなる〈不可知〉なのである。逆に仏教徒にとっては、無常はすべて、幻のなかに包みこまれていて、実際その言葉の意味そのものがほのめかしているとおりに見えるのだが、永遠の実在の方は、言うに言われぬものではあっても、これだけは感知できるものなのである。日本人の思想を西洋の言葉で解釈した結果を考えると、その違いは非常に重要なものとなる。ハーン氏自身は、存在を見るこれら二つの方法の間にある溝に気づいていないようであるし、またその結果、この両者の橋渡しによって彼の芸術が開いた、この感覚の領域の十分な独創性を評価してはいないようにさえ見える。融合したハーン氏の思想においては、無常な現象界は知り得るものでもあり、知られざるものでもある。それは西欧的認

識の現実で、それゆえ東洋の作家にはありえない強い影響力と十分な意味とを与えられている。だが同時に、それは東洋の哲学の非現実性でもあって、それゆえ幻とかすかな陰影のなかに包まれ、その中へそれは今にも溶解してしまいそうなのである。それはこの現象界、半現実の世界、精神と物質の混合した領域であって、想像もできない色とりどりの美しさで、あまり強く見つめると消え失せてしまい、目をじらすかと思うと、今度はこの異境で、存在の謎を解いてくれるあの探求久しい一語を〈魂〉に約束するかに見える。それは解明しながら悩ませる、といった新しい象徴的手法である。それは日本文学の、さらに不気味な、一層微妙な側面に芸術家がこだわり、これらの意識下の動機に、原作ではもちえなかったリアリズムの迫力を添えるようしむけた。無常の認識につきまとうのは、精神から切り離された現象にはほとんど意味の重みを感じられない東洋の歌の壊れやすい美が遠く及ばぬ、ある深みにある切なる悔恨であり、また同じく、科学が個性の観念に物質的变化の法則を持ち込む以前に作られた西洋の歌も遠く及ばぬ悔恨である。この科学との融合から、過去は人の心のうちに内在するという東洋の信仰は、今や生き生きとした実際の存在感を帯び、〈魂〉を溶解して、生命の神秘的な未踏の背景と霊的な親交に浸らせるのである。この新しい無常感と、内在する過去に力を添えたこの新しいリアリズムの結果として、あらゆる原初的な感動は不思議な言語に翻訳された。その言語は、一旦想像力をつかむや否や、わが心理学者がおぼろげに潜在意識ないしは意識下と呼ぶ世界に類似した夢の領域に我らを運ぶのである。この心理状態が文学に与える広範囲の影響を予測することは容易でない。ハーン氏はこの新しい人間の感動をどこにも体系的に扱ってはいないが、彼のエッセイのあちこちに散らばった章句を集めてみれば、その範囲や効力の概念が得られるかもしれない。

先験的な美の感動——初恋と母性愛と

美自体は、すべての真の芸術のそれと同様に、ハーン氏の芸術の本質をなすものだが、この東洋と西洋の融合から、新しい中身を得ている。そのようにして裸体美を描いた絵の前に立てば、我々は、著者の言葉を借りると、あらためてその意味を問うかもしれない。神々しく、絶対的な美の抽象でもあるあの裸体像、——その内部に、あるいはそれを見る者の心の内に、憂鬱を交えないでもない、この驚嘆と喜びの衝撃を起こすどんな力があるというのだろうか。人は長く見ていればいるほど、その驚異は大きくなる。その美が、事物を見たあらゆる記憶を凌駕しない一本の線や線の一部もないからである。プラトンは美の衝撃を、〈魂〉が急に思い出したアイデアの世界の半端な記憶であると説明した。「ここにアイデアの世界の事物のイメージもしくは似姿を見る者は、稲妻のようなショックを受け、やがて、言わば、虚説状態になる。」スペンサーの実証心理学は、我ら自身の時代にこう言明する、人間感情の最も強い力、初恋は、それが現れるときには、あらゆる個人的経験に絶対的に先だって起こるものであると。こうして古代の思想と現代のそれとは——形而上

学と科学とは——一個人に知られた人間の美の最初の深い感動は全然個人的なものでないという認識で一致する。最高の芸術が与えるあの衝撃についても、同じ真理があてはまるに違いないではないか。美の感動は、すべての感動と同様、たしかに測りしれない過去の、想像もできない無数の経験が受け継がれてできた産物である。あらゆる審美的感動には、頭脳の魔術的な土壌に埋めこまれた幾億兆もの霊的記憶の震動がある。そして人はめいめい、自分の内に、かつて親しく眺めた形、色、品位の、今は亡き知覚の無限の合成物でしかない美の理想を抱いているのである。この理想、それは眠っていて、——本質はまだ潜在しているが——想像力が働く以前、意のままに呼び覚まされることはない。しかし、生きた外部に、何かある漠然とした親近感を認めるやいなや、電気が通じたようにパッと点灯するやもしれない。すると、あの怪しく、物悲しくも快い感動が身を震わせて、それに伴い、生命と時間の潮の流れが急に後戻りしてゆくのである。

そこでさらに、ハーン氏に従えば、いかに、この過去が内在するという認識が、恋愛感情の束縛に不思議な意味を与えるかを推察することは容易である。とりわけ、その感情の衝撃が、現在の世俗的な打算によって煩わされることもない初恋に対して。一体その魅力は何であろうか、と我々はこの著者とともに問うてみる、人が思わずふと選んだ女性に初めて出会ったとき、その甘美で惑乱的な光で恋人の目をくらましてしまうとは？それは誰の魔術なのであろうか？それは何か現存する偶像に宿る力であろうか？いやむしろ、偶像崇拜者の中の死者の力であろう。死者がその魔術をかけるのである。彼らがもっているもの、それが恋人の心に衝撃を起こすものである。彼らがもっているもの、それが一少女の手に初めて触れたとき、恋人の血管にわななくように伝わる電氣的な震動である。我らが恋の対象となったその人の眼に見入る、すると我らは、あたかも命ある存在の、なにか急に強い刺激を受けたかのように——ある超天国的な一瞬——以前は想像もしなかった、そして二度と再び表れない真実を垣間見たかのようになる。そこには、たしかに幻覚がある。我らは神々しいものを目撃したように思う。しかし我らがそれによって幻惑し、だまされているもの、この神々しいものそれ自体は、死者の霊なのである。我ら人間の視力は、現在の表面を突き破って過去何万年もの深みを洞察し、——いのちの仮面を突き破り、巨大な死の夜の闇を洞察する。ほんの一瞬、我らは言い知れぬ美と神秘と深みを自覚する、がやがて、再び永遠にヴェールが降りてしまう。我らが崇める眼の輝きをその眼のもののだとするのはただ、星の光度を明けの明星のものとするようなものである。それは〈現今〉の影の彼方からの反射であって、——消えた恒星の幻光 (ghost-light) である。その乙女の^{まなざ}眼差し中で、それとは気づかずに、我らは天使たちより多い無数の眼差し——外の場所では闇と塵の中へ消えてしまう眼差しと出会うのである。

そして、もし我々が別の、もっと純な形の愛に目を向けるとしても、我々が見るのはやはり同じようなその力である。女性の魂をそれ自体で一個のもの、——一つの特有な身体に合うように特に造られた、あるもの——と仮定するかぎり、母性愛の美と不可思議とは

我々に十分明かされることはないであろう。しかしより深い知識を以てすれば、無慮幾百万という死せる母たちに継承された愛が、一つのいのちに秘蔵されてきたことを認めねばならない。——幼子が聞く母の言葉の限らない優しさ、——じっと見るその眼差しに应える母の愛撫の顔つきの限らない柔和さというものは、ただこのようにしか解釈できないということ。

偉大な音楽の感動

そのようにまた、我らが器楽のハーモニーや歌声のメロディーに耳を傾けると、我らの心中に不思議な感動が起き、我ら自身を測り知れない経験へと拡大し、我らのつまらぬ生活の、現在の気苦労を越えて、何か広大な関心事——あまりに広大で魂が神聖な希望と神聖な畏れの驚異の間をさまようほどの関心事に我らを高揚するように思われる。偉大な音楽は心霊のあらしであり、我らの心中にある過去の神秘を、測り知れない深みにまで、掻きたてるものである。もしくは、それは驚くべき魔法であると言ってよいかも知れぬ。青春とその喜びや優しさの、あらゆる亡霊を呼び起こす音色がある。——滅び去った恋のあらゆる幻の苦しみを呼び出す音色もある。——いまは滅びた威厳と力と栄光の、あらゆる感情、——いまは息絶えたあらゆる歓喜、——忘れられたあらゆる雅量のかずかず、それらをすべて蘇らせる音色もあるのだ。自分の人生がわずか百年足らず前に始まったのだと、漫然と夢見ている人には、音楽の効果が説明できないように思われても、無理もないであろう！この真理を打ち明けられた人は、メロディーのさざ波の一つ一つ、ハーモニーの大波の一つ一つに対して、〈生と死の大海〉から、古代の快樂と苦痛の、何か測り知れない渦潮が、心中に応答するのが分かる。

天才自身、音楽や詩歌、生身の人生を拡大するあらゆる芸術の巨匠、この天才それ自身にしても、人智の反響板の上に莫大な過去を反響させたものにほかならない。それは極めて精巧に作られており、人間個人の衝動がぶつかって鈍り、ごちゃごちゃになって粗大な魂から出てくる反響を、異物を混ぜないで純粹に送り出すのである。

新しい恐怖の心理探求

このような章句を一読すれば、ハーン氏は文学に心理探求の新要素を取り入れたというのが、適当ではないだろうか？我々は実際過去の中に生きているのだが、愚かにも叫んでいるのである、過去は死んだと。やせた白い獵犬が、獲物を追いつめることで目覚めされた感情についての、ある珍しい考察の中でハーン氏が示すのは、思考力もなく記憶力もないとして我々が軽蔑する獣すらも、この暗い、過去に遡る時間の深淵の、言葉にはならぬ意識に満たされ、その影が彼らの敏感な魂のうえに落ちて、おぼろげな恐怖に寒気を覚えさせる、ということである。——恐怖、といま言ったのは、この新しい心理探求は、その研究者をおそらく困惑させ畏怖させる意味合いを含んでいるということが、明白になって

くるからである。こうした瞑想の霊的な残留の中に、人類が何百年、いや何千年もの間、半ばそれとは知らずにヴェールに包んできた幻が、ぼんやりとその前兆を表わしているのを我々は感知するのかもしれない。私にはよく分からないが、この恐るべき露見の前兆は、人類の不分明な歴史の中で、多くのことを説明するやに思われる。この恐怖のために、未開人は、周りの自然の神秘を洞察していたように見える魔法使いの前で恐れおののいた。それは、あからさまなギリシャ人の間に、後世キリスト教徒の間でそうであったが、多様な形で、迫害や死の中にさえ現れた。それは、神話となって、つきまとうプロメテウスの伝説に現れた。天上の火を盗み（禁じられた自然法則の覗き見のシンボルである）、自らに苦痛と鎖の縛めを、人類には過酷な労働の生活を招いたという。

科学がキリスト教世界に与えた恐怖

しかしとりわけ、キリスト教世界では、この無形の恐怖が、ある名と体を帯びている。それは審問の心情であり、常に破門や拷問とともに、自然の奥深い力のヴェールを剥ぎとる結果起きている。かくして、それ自身は文明の潜在的要素となっていて——なかには反文明的な意見をもつ人もいようが、科学的発見に対するこの長い間にわたる宗教の抗議を、単に迷信を蒸発させただけとして一笑に付そうという人は、非常に向こう見ずな人か非常に無知な人であろう。もし我々が、科学と啓示の間の激しい戦いを調べてみれば、教会が、常に存在する、つかみどころのない、ある恐怖に動かされていることが分かるであろう。そして、この恐怖の源が我々に明らかにされるにつれて、我々は教会の行為を非難する気が起きにくくなるだろう。我々は少なくともその闘争で教会に同情するだろう。というのも、たとえ教会が迫害者であったとしても、教会はまた、失われた大義の擁護者でもあったからである。

実際、初めのうちは教会は勝ちほこっていた。ギリシャ哲学と科学の残存との戦いでは、新しい啓示の預言者たちが易々と勝っていた。「無学は帰依の母である」という言葉が教皇グレゴリーのコットーであったし、無学が勝利を得ていた。我々は、古代の輝かしい自然学を、哲学者、数学者であったヒュパティア⁷に関わる殉教と見做すのを好む。

ヒュパティアよ、美しき体现者、
学問の大いなる楽しみの

そして彼女の裸体画、偏屈な群衆の手で、蠣殻によってズタズタに切りさいなまれたその絵は、古代自然信仰を解体する寓意画であった。

しかし、教会は学問との絶え間ない闘争で、そううまくはいかず、やがてルネサンスの時代になって、教会はコペルニクスの支持者たちを襲った。ジョルダノ・ブルーノ⁸が、宇宙空間の無限と、太陽をめぐる地球の回転を教えたかどで、火刑に処せられねばならな

ったこと、またガリレオが同じ理由で、あれほど非難攻撃に悩まされねばならなかったことが、いま我々には、つまらぬ犯罪に思われよう。しかし本質的には、問題は宗教にとって極めて重要なものであった。そしてブルーノが、その宣告は自分がそれを受けた以上の恐怖とともに彼に対して下された、と言ったのは当たっていたかも知れない。かたくなな偏屈が示されたにも拘らず、それは人間の魂の保全のための崇高な争いであった。というのも、神聖な救済のドラマが、果てしない空間の中の単なる微粒子に住まう、取るにたならぬ生物種族のために計画されたと、誰が信じるであろうか。コペルニクスと彼の支持者たちは、宇宙が人間の故郷の周囲を回るという古い信仰の誤りを悟らせた。この時から、地球の歴史は無数のおびただしい世界のうちの、最小の一つの、大した意味もない物語であることになった。天地創造における人間の優位と主権はもはや信じられず、そして科学の勝利において、我々の個人的な自尊心は致命的な打撃を受けたのである。

しかしながら、習慣と時間がある程度その傷を癒し、科学が、進化の旗のもと、再び勢力を盛り返すまでは、ことはうまく運んでいた。何巻もの本が書かれて、新しい信念がただ人間の尊厳を増すのみであることを明かそうとした。そしてダーウィン自身も、彼の理論に対する広範囲にわたる反対がどうしても理解できないと公言した。しかし、神学的な敵意を引き起こした新しい恐怖は、何百年か前のコペルニクスの侵入に対する恐怖と同じくらい、しっかりと根付いたものであった。進化の法則の中には、神の摂理や人間の魂が有する天与の特権が入る余地はなかった。我々は野獣の兄弟とされ、地を這う不潔なものと同類とされた。しかしこの口争いも、それ以前の口論が納まったときと同様、一応は調停された。教皇グレゴリーが宣言したように、我々が生ける自然と同類であることを隠すのに無学が必要であるとしても、何ほどのことがあろう、と。我々の故郷が宇宙の一点にすぎぬとしても、何ほどのことがあろう。動物的墮落の過去を受け継いでいるとしても、何ほどのことがあろう。——なおも我々の意識は、こうしたことを意に介せず、天与の優位と孤立を想定することで、心穏やかに安住するのである。

進化論が白日の下に曝^{さら}した過去

しかし、今やついに、我々は打撃を受けて安心を奪いさられる。我々は隠れた過去の恥に気づかされ、古代からつきまとっていた恐怖が、見るも恐ろしいほど赤裸々に暴露される。たまたま博物館の中を彷徨い歩いたことがあるだろうか、そこに収集された古代世界の遺物、——突き通せない鱗で武装した汚らしい両生類や、海を引っかきまわした長さ8尋もあるグロテスクな大蛇、悪夢のように広げた翼で空を羽ばたく巨大な翔虫類など。自然がこうした忌まわしい、とんでもない物をこしらえて、すっかり消耗したとき、世界はどんな様子だったか、想像力も尻込みしようというものである。我々は土に穴を掘って、これら残忍な獣類の生長の、隠しておきたい記録を、白日の下に曝した。ちょっと考えても見られよ、もし何か新しい地質学が、これら大地の記録に相当する、我らの頭脳の中に

覆われた記憶の地層をさらけ出したとしたら、どういうことになるか。というのも、そこには失われたものは何一つなく、また何やら不思議な仕方で、あの暗い過去すべての記憶が我々の内部に蓄えられているからである。もし進化の事実が本当であるなら、我々は魂のなかで、そうした経験と、その物質的な形が大地の岩床のなかに横たわっているところの、無数の世代のいのちの、継承者となる。我々自身の意識の中に、古代のあの巨大な、出来そこなった遺物に対応するような恐怖や興奮、残酷な感情や有り余るほどの欲望の記憶を保持することの恐ろしさを考えてみられるがよい。世界がその恥を感じて、^{リーダー}冥途の川の水一杯を求めて叫ばずにいられようか、たとえそれが涅槃の忘却ほども深い眠りであるとしても？ならばそれは、初めから宗教の信奉者を苦しめ、科学の暴露を攻撃させた恐怖である。というのも、聖なるものへの、どんな信仰や美が、そんな露呈のあとで耐えていられようか。まったく有りえないのである、精神的な恩寵をうるため、人の記憶と性格とを消し去って、精神を、渡れない淵によって肉体の経験から切り離してしまわない限り。そしてこの恐怖の影の典型は、ノアが息子ハム⁹にかけた呪いである、と私は思う。

進化論と輪廻

この恐怖の赤裸々な最終の結果は、一人の著者の上述の奇談とエッセイに予兆されており、この人は、私が示そうとしたように、我ら西洋のダーウィンの理論と、仏教とともに日本にもたらされ、^{ミカド}天皇の国民のおかしげな奇談に奇妙に接ぎ木された、輪廻の不思議な教義とを、分ちがたく結合したのである。この永遠に続く生と死と再生の教義と結ばれた恐怖と憂鬱の凄まじいリアリズムを理解するためには、この概念が最初に人間の心をつかんだガンジス川の燃える流域へ行かねばなるまい。しかしこの果てしない不安の観念が圧倒的であるにせよ、西洋で発達した科学的な進化の仮説との接触によって、新しい陰影がそれにつけ加えられるやに思われる。進化は一つの理論で、外部の現象を観察して引き出され、人間は過去に遡る無数の世代のいのちの最後の産物である、とするものである。しかし、進化はこれまで人間の魂の奥深い意識に訴えることを差し控えてきた。輪廻は、これとは反対に、魂の意識から展開した、半ば神秘的な理論であり、おぼろげな仕方で未生以前の限らない存在の記憶を持ち運ぶように思われる。しかし東洋のこの象徴的な信仰は、外界の科学的な研究に確証を求めたことはない。そこで出てくるのがこれら二つの理論の混合であり、その結果はあのような、人類が本能的に避け、非難してきた、身の毛もよだつ現実の暴露である（願わくばそれらが結局擬似現実になって欲しいものだ）。

「夢魔の感触」

私が、ハーン氏のスケッチや翻訳を、多くの読者には、それに値する以上に見えるほど真剣な態度で扱ってきたのも、それらが東洋と西洋のこうした融合から起こる測り知れない影響を暗示していると見るからである。最後に、懐疑的ながら私が言及したいと思うの

は、あの「夢魔の感触」というエッセイである。これは、我々の夢をしょっちゅう悩ます、身震いするような捕捉の恐れを説明し、その恐怖を、幽霊に触られるという広く普及した迷信的な恐れと結びつけようと試みるものである。このエッセイの結びの言葉は、どこかラパチャーニ¹⁰の庭に咲く花の、気味わるい美と刺すような匂いをもっている。

さらに、進化のあらゆる過程を通じて、遺伝がこのような感覚の経験を積み重ねてきたのであろう。宗教的信仰の反動を経て進化した、想像上の苦しみの、あのような形の下に、未開の原始的な恐れ、何やら定かでない遺物が残存し、また、その下にもっとおぼろげだが類いなく深い古代の動物恐怖の深層が存続しているのであろう。現代の子供の夢のなかで、すべてこれらの潜在的事物が活気づくのかも知れない、一つ、その下にまた一つと、底知れず、夢魔の訪れと成長にともなって。

何かある特異な夢魔の幻影は、それがうごめく頭脳よりも古い歴史をもっているかどうかは、疑わしいかもしれない。しかし触れられるというショックは、影のようなものに捕まえられるという全人類の経験と夢の中で接する、その接点を示しているやに思われる。自我の奥深いところ——太陽の生命からどんな光も届かぬ深淵——は不思議にも眠りの中でかき立てられるのかもしれない。そして、その闇のなかから、何百万年という歳月でも測ることのできない記憶の振動が、直ちに応えるのかもしれない。

【訳注】

- ¹ Menpes, Mortimer (1860-1938) イギリスの画家・エッセイスト。オーストラリア生まれ。ホイットラーのもとで絵を学ぶ。近東および極東の風景描写で知られる。
- ² 九代目市川団十郎。明治の三名優の一人と言われた。
- ³ Herrick, Robert (1591-1633) 17世紀イギリスの王党派の詩人。この句は「乙女らに、時を惜しめと」と題する詩の冒頭の一句。
- ⁴ Malherbe, François de (1555-1628) 厳密な詩法によりフランス古典詩の基礎を築く。この句は友人の娘の死を哀悼した詩の一節。
- ⁵ Huxley, Thomas (1825-95) イギリスの生物学者。
- ⁶ Spencer, Herbert (1820-1903) イギリスの進化論者。ハーンに多大の影響を与えた。
- ⁷ Hypatia (370?-415) アレクサンドリアの新プラトン主義の女性哲学者・数学者。キリスト教徒の暴動が起きた時、殺害されたという。
- ⁸ Giordano Bruno (1548?-1600) ルネサンス期の哲学者。異端として火刑にされた。
- ⁹ 「旧約聖書」創世記、9:25. 酔っぱらって裸でいた父を目撃し、呪われたという。
- ¹⁰ 実験のため庭に毒性の木を植えていた科学者。娘を毒の息をもつ女にしてしまう。(ホーソーンの短編「ラパチャーニの娘」より)。